

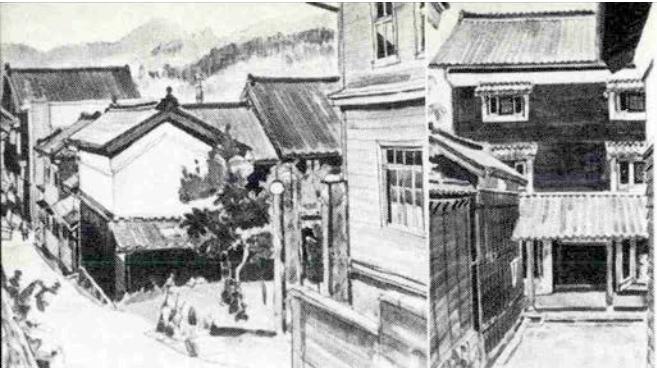
△その84▽

岐阜県明智町の「日本大正村」の村おこしの運動から学ぼう

鳴田 勝次 △神戸大学建築学科助教授▽

岐阜県明智町が今大変な人気である。日本大正村として五十八年二月に提唱され、五十九年五月に立村式が挙行されて正式に出発したものだが、山間の僻地がどうして評判になつてゐるのだろうか。

十月中旬の秋たけなわの一日、神戸からこの村へ日帰りの旅をした。中央線恵那駅から第三セクターの明智鉄道に乗り換えて数十分駅を出たとたん、ひとりのお年寄りが近付いて来て、「どこへ行



日本大正村(明智)役場附近(左) 銀行蔵と郷土資料館(右) 一当地の絵葉書より

かかるのですか。観光でしたらご案内します」と親切な言葉でこの村との接触が始まつた。ちっぽけなこの駅の一隅の日本大正村案内所のおひとりだつた。この明智町は元明智・光秀城下であり、旗本遠山家の屋敷町でもあつた。中馬街道と南北街道の交点であり、物資運搬の主要な位置を占めていたが、明治から大正にかけて、いくつもの製糸工場が出現して、活気ある街並を形成した。その面影が現代に伝えられているのである。

徒歩一時間半コースとか三時間コースが設定されている。明智駅から元郵便局・大正村資料館・遠山家下屋敷跡・元カフェ・大正の街並・お牧の方の墓・団子杉・白鷹城跡・天神神社・御陣屋跡・龍護寺・八王子神社・大正村役場など、中世から近代への村の歴史の断面をのぞかせてくれる。

それにしても古き良き時代の大正のロマンが伝わつて来るといふよりも、村全体に「大正村」を盛り立てる村おこし運動のふんいきが、村民全体にみなぎつてゐることがみごとである。

明智町の行政体制は、この民間主導のボランティア活動を裏から

バッカアップして表に出ない態度である。牛乳屋さんの企画委員長などが中心になつて、村民みんなで運動を展開している。駅に下り立つた時に声をかけられたのは、老人クラブからのボランティアさんであつた。町会議員さんが資料館の切符の・・・をぎりをやられたり、婦人会でお茶の接待をされたり、ほのぼのした人情が伝わつて来る。金沢の江戸村も、犬山の明治村も、その時代の各地の建物を移築して、ものを見せる観光地となつてゐるが、ここではふるさとのひとの心に接してほしいということであった。この大正村の実行委員会の方が語られた。「昔は今ではない。しかし町をひとつにするものはここに住み、ここを大切にす る一体感だと思います。」と力強く語られたのは印象的だった。

この十月二十五日全国にアビールして、日本大正村シンボジウム「小さな町の大きな役割——いまなぜ大正村か——」が大盛況で行なわれたし、十一月五日神戸都市問題研究所の宮崎賞が受賞される。当研究所の十周年を記念して昨年から行なわれている神戸市長宮崎辰雄理事長から与えられる地域経営活動賞である。地方のふるさと運動の努力にびつたりとした「大正村」に拍手を送ると共に、この村を訪ねた感動をかみしめながら、大都市のまちづくりもじっくりと見直すべきであろうと感じているのである。

イメージの中の神戸

文 鈴木 藤原 保之 漢

□自動記述風に

いつの日も、予感にむかってはばたい
ている。風見鶏。旗。汎神論。

灘の海の紺。海図の上を航行している
白い船舶。六分儀あるいは幾何学。坂道
と突堤に関する詩的考察。トア・ロード
合歛の並木一千一秒の中に、永遠が封じ
こめられる。

静止する矢、簾の梅。^{えびら}イナガキ・タル
ホ、津村信夫、竹中郁。かつて詩人が愛
してやまなかつた、海峡の、あの大きな
夕日。

高鳴る管楽器のひとふし。開かれたま
まの扇。クレーンの脚。音楽。ハーバー

ライト。記憶の中の雜踏、花電車。聚樂
館。

関帝廟、六角堂。革命家が、自らのて

のひらに見出だす夢の結晶。菓子皿と珈
琲、木の椅子。六甲から雪のこぼれる日
若い杜氏たちが点したであろう暖かな電
灯。桶、酒蔵。琥珀色の、豊かな眠り。

手に星を掬い、そしてまた星をちりば
めてみる。すなわち曼陀羅。摩耶、とい
う言葉のひびき。青空に近い牧場では、
羊が雲を喰んでいる？明るむ天井川。花
のトンネルを往来する。木の下陰、心の
不在を吹く松風。琴と笛。鐘楼。モスク
のてっぺんに掛っていた白い月。出窓に
舞う鳩。いつも輝いていた沖の方。

誰かのペンで、歴史は新しく書き足さ
れている。いつの日も、予感にむかって
はばたいていた風見鶏。その羽根の風の
色。



イメージの中の神戸

文・白羽 弥仁
写真・小山 保

□なぜ、神戸で撮るんだ？

暫く神戸を撮る機会から遠ざかっているので、イメージの中の神戸などといふことになると、逢うには遠すぎる恋人のようで、ひどく切ない。映画作りは、イメージの具現化の作業である。性憑りもなく映画を作りたいと思い続けていたれることは、やはり神戸や芦屋、西宮の街並のデザインや空気を描くことにこだわっているからだと思う。

東京で、同業の人達と話していると「何故神戸で撮るんだ？ 東京でやれよ」とよく言われる。東京に住んで四年になりました地理もだいぶのみ始めた。が、そこにイメージはない。まだ「情報」でしかないのである。仕事で東京を舞台に脚本を書くことがあるが、僕はほとんど場所指

定をしない。というか、できない。プロデューサーから「ここはどこらあたり？ 吉祥寺？ 成城？」と訊かれても、「まあ、ロケハンしてから決めましょ」と言ってしまう。神戸は、場所がイメージを想起させる。設定ができると次は場所がスッと浮かぶ。例えば「ギャングのカーチェイス」という設定があると、これはもう絶対ボートアイランドのどこそこ、という具合に。

様々な思い出が、それぞれの場所と結びついている。もちろん、暗い思いもあるが強烈に記憶に残っていること（だから、時どき思いだすこと）は、甘く切ない映像として頭の中のスクリーンに映写される。そしてそれは決まって神戸が舞台なのだ。



イメージの中の神戸

写真・杉山知子
紹介

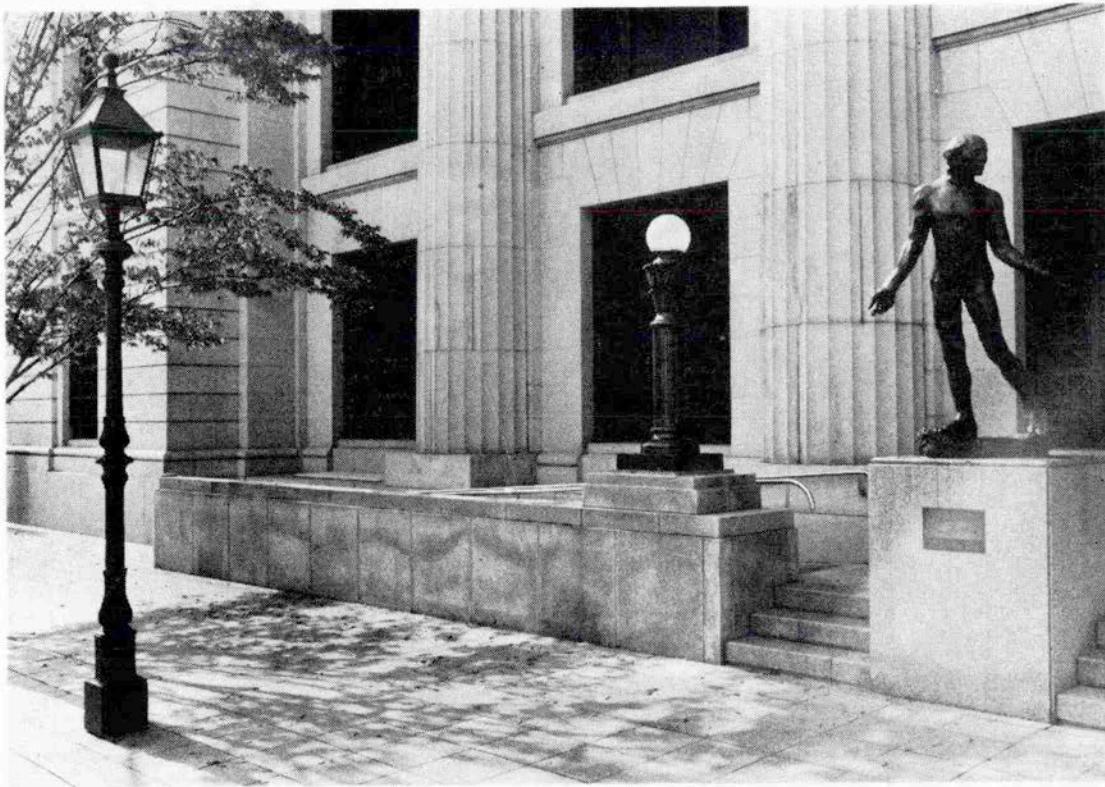
アトリエの窓

フラワーロードの中ほどを、二本西に入った角の、古いビルの四階に、私のアトリエはあります。ほとんど毎日、あわただしく家を出でては、アトリエに向かいます。そうかといって、いつも物を創つてているかと言うと、ちょっと首をかしげたりするのですが、何もしなくとも、ここに居る方が、気持ちが落ち着くのです。晴れた日などは、窓を一杯に開けて、窓ぎわの椅子に腰掛け（というよりは半分寝そべって）、ひねもすのたりのたり：と時を過ごします。毎日変わらない景色でも、その日のお天気や気温、風の臭いや私のコンディションによって、微妙に変化してくるのです。

向かい側に建つ、ココア色のビルの斜めには、京町通りをはさんで、オリエン

タルホテル、博物館が見えます。それらの建物を越えて、堅牢な古めかしいビルの屋上がのぞいています。こういうロケーションのバックには、時には船の汽笛や、夕方には、カラスの鳴き声なんかも聞こえたりして、不思議にマッチするのです。又、夏が近くなると、なま暖い海からの風が、神戸らしい潮の香りを運んできます。気持ちの良い匂いとはとても言えないのですが、神戸っ子の私は、神戸の良さを感じてしまうのです。

こういう神戸のエッセンスのきいたアトリエで、気ままに物を創ることに、私の作品の大切なキー・ポイントがあるようです。でも、あくまでも、神戸産、TOMOS' WORLDで、広く外の世界へ広げてゆきたいなと思っているのです。



イメージの中の神戸

文・元永定正
写真・杉尾友士郎

□原風景の街

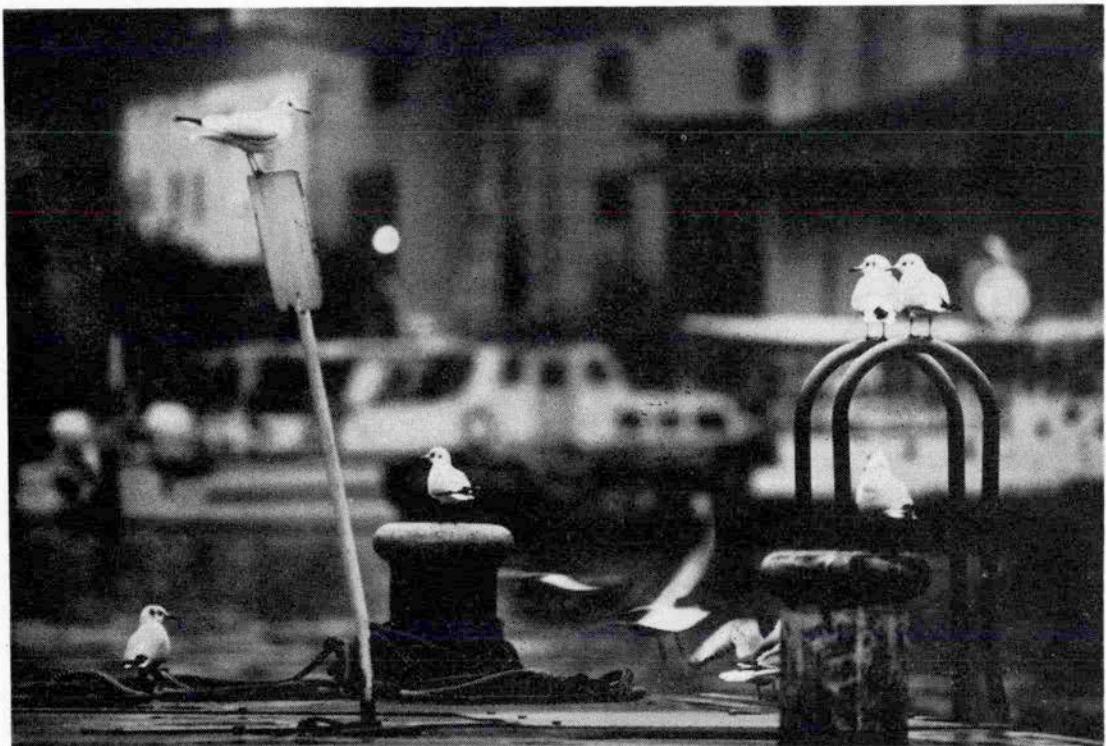
三十三年前私は伊賀から神戸・魚崎にやつて來た、知人は一人もいなかつた。だから始めの印象は人より自然になつたのだろう。

伊賀にも山はあるけれど神戸の山は山の中にもネオンサインが光つてゐる、それに感激驚いて私の初期の抽象画のヒントになつた。それは摩耶山、六甲山、今まで

も神戸のイメージの一番はじめはこの山からだ。神戸に来て絵の勉強は加納町の美專堂、ほんの少しの間だつたが友達が出来た。のみに行くのはジャンジャン市場、白いの一杯、天ぷらおくれ、あの雑踏がなつかしい。海を見るのは最初ぢやないが、こんな港ははじめてで、ついでがあつたらよく見に行つたメリケン波止場は演歌の港、元町通りに新開地、伊賀

の上野にないところ、めずらしく面白くて、うろうろうろとしたところ、コーヒームのは西村コーヒーそれはそこしか知らないんだ。きたないがきらくで安くて画かきが集まる蛸の壺のんでさわいで終電車、せまくてきたないのみやはシャネルもそうでカモカのオッチャン、おせいさん、ここでも時間は超越してゐる、それもなくなりセブンも消えた。

私は画かき神戸の画廊も大事なところローズガーデンのギャラリー、ド・ラ・ペは版画、新らしい現代美術の画廊はうれしいけれど、なぜか壁面古くてきたないそれが特色?トーアロード画廊、シティ・ギャラリーは若さの画廊、大の老舗は元町画廊、いつも変らぬ佐藤さん。年うつり人変り神戸の印象ごぢやごぢやと私の心で踊つてる。



イメージの中の神戸

文・堀江珠喜
写真・森井頼紹

□ アンドロギュナスな街 KOBE

神戸はアンドロギュヌス的な街である。こう書くと、「また世紀末かぶれのディレッタントがほざいている」と言われそうだ。アンドロギュヌスは、後からその裸体を見て「ああいい女」と思い、前へまわると「ギャツ男！」ということになる摩訶不思議な存在である。

神戸もまたしかり。「港町」と思つてみるとすぐ後に山があるし、歴史があつても、また金髪の坊やが「怒るでエー」と漫才師のような関西弁をしゃべっても違和感のない街。紳士がケーキを注文し淑女がハイボールをあおつても許される

街。ラブ・ホテルの横に学校もあれば、「神戸は県警とY組とが守ってくれる」と豪語する者もいる。

それがひとたびパーティともなれば、老若男女が共に浮かれ騒ぐ。例えば京都ならば、紹介者を三人くらいたててやつとお目通りがかなうような偉いお方でも、神戸では無礼講。そもそも夜景とは山から見下ろすものだと思つていたが、ここでは海から山を眺める——これぞ倒錯の美。

ところで「不倫」という言葉は神戸に似合わない。これはヤボな東急沿線金妻欲求不満地域の産物なのだから。神戸では、あくまで「大人の恋」とシャレてみたい。



イメージの中の神戸

文・武田 信明
写真・藤原 保之

□ 絵葉書の塔

一枚の絵葉書がある。いつの時代のものかは分らないが、漠然として白黒の写真といい、葉書の古びた様式といい、大分昔のものであることは確からしい。葉書の一番下には△新開地界隈▽と印刷され、かつての新開地が塔を遠景に写し出されている。何の変哲もない風景なのだが、私には妙に気にかかるのである。とりわけ、写真に小さく写っている塔のことを思い出す度、何とも落ち着かぬ気分に襲われるのである。

神戸に生まれ育った私は、小さい頃から市電に乗ることが好きであった。車輌の一番前に立つて、運転手が不思議な形のレバーを操つるのを見ながら、電車の前面に迫つてくる街並を見るのが、うれ

しかつたのである。中でも一番好きだつたのは、上沢を過ぎて湊川公園のトンネルにさしかかる辺りで、右手に塔が見えてくる風景であった。子供心に、中学に上がつたら、一人であそこへ登ろうと思つていたのを、今でも覚えている。今にして思えば、それはちょうど、荒れはてた廃屋を探検してみたい気持ちのようなものではなかつただろうか。しかし、その夢もついに夢で終わつてしまつた。塔は、いつの間にか取り壊されてしまった。

この絵葉書は、実は私の祖母にもらつたものである。その祖母もこの春に逝ってしまった。祖母が、こんな絵葉書を何故大事にしまつていたのか。それもこれも、全てが二度と開けることのできぬ宝箱の中に封じ込められてしまった。



イメージの中の神戸

文・伊勢田史郎
写真・小山保

□緑いろの館

かなり急な坂道を女のひとが降りてくる。浅黒い肌に紫いろの薄い布を纏っている。擦れ違う時に目が遇つた。何かに驚いたような大きく瞳つた黒い眸だ。過ぎ去つた後に香料がすこし匂つた。額の中心の小さな赤い円形の印が何時までも眼底にのこつた。

私が勤めていた経済新聞の社長の家がその坂の上にあつた。二階建ての異人館で淡い緑いろをしていた。カナッペをつまみ強い酒を飲みながら四人で卓を囲んだ。窓の下には宝石箱をぶちまけたような煌らかな灯の海があつた。白い牌を搔き雜ざるのに倦んで目をあげた。ほつんほつん……と灯が消えてゆく。闇が眼底下に少しづつ拡がつてゆくのだ。

教会の尖塔だけが、その闇のなかに白

く浮んでいた。学齢に満たぬ頃、母はよく私の手をひいて教会に通つていた。背の高いボプラの並木が整列していたが、舗装されていない道には時折つむじ風が白く舞つたりした。クリスチャンが殖えはじめた戦後になつて、母は仏教徒に転じた。彼女は私に何かを語りかけていたのに違ひないのだが……。

ざわわわわざわわわわ……。浜辺に打ち寄せる波の音がずうつと耳の底にあつた。一晩中。高台の家で睡つているというのに。

塩湯という大衆浴場が海ぎわにあって、幼児の私は女湯の窓のむこうに鳥賊つり舟のともす火をいく度となく母と見たが、そんな記憶とともに海からの声は私の内らでふと甦る。高台のその館がなくなつてもう三十年余になる。



イメージの中の神戸

文・蒼一
写真・杉尾友士郎

ガラス細工の街

少女は歌うだろう。わたしは永い永い間、夕暮れの中にいた。見あげると、爽やかな夕空は、果てしなく広がつていてその下を、勤めをおえた人達が、届託なく言葉を投げかけ頷きあいながら、街角の建物から現れては何処かへ消えていった。

空気が澄んでいて、それはひたひたとわたしを満たし、しみじみとした安らぎが、ひらけた蒼穹に流れて行く。私は孤独であることの自由さの中で、思いつきりの幸せをつかんでもみたい！そう叫ばずにはおれない、哀しいほどの思いが身内からこみあげてきた時、感じられないほど爽やかさで、風が通り抜けて行つた。ああ、わたしたちの恋みたいな風、風のように、さわやかに、過ぎて往つた愛。

その翳り。わたしは、風を追いかけてみたいなど、瞬間、思ったのだった。

そのような思い出の中の街を、この港町がそつと隠しているとしたら、それはこの都市の懐の深さと優しさのせいであろう。あれは、もうずいぶん昔のことと思える。山膚を上りきり、眼下に見たモザイク模様のガラス細工のような街であった。国道が一本港に通じ、その街は山懐に抱かれて、透明な空気のなかに沈んでいた。あれは何という町であつたろう。赤いレンガを敷いた石段が、はしご段のように町中へ真すぐに下りて行つた。その時、わたしはこの町を、リオ・デ・ジャネイロにとても似ているナと、思つたのだ。



イメージの中の神戸

文 石阪 春生
写真 緒方しげを

□ 感覚神戸

神戸を語るということは、長年神戸に住んでいる私にとっては面はゆい。ましてイメージという言葉は絵かきにとっては困った単語である。かりに私がもし神戸に住んでいなければ、他の土地から生れた神戸を郷愁的にもイメージしやすいことはたしかである。最近よく“神戸らしい”とか“神戸的”とか、謂ゆるイメージ用語にしばし出会う。

たとえば自分のことをいうのもおかしいが、あなたの絵は神戸らしい絵ですね♪と、ふといわれる。そのたび私は返事にとまどっている。ただこれは裏がえしに考えてみれば人々が神戸にそうしたイメージ的風土を感じていることだとは思う。神戸はこうした意味で海、港、船、外来ハイカラ文化と使い古されてきた言

葉たち。私もそれらにまみれ洗礼を受け育ちながら、自身の絵の中の風土を身につけたかもしれない。これは私にとっても不思議な時間であり、それから逃れられないことも感じている。またそれにあまんじているともいいえるのである。たしかに日本列島の中でいま神戸は一つの確かに雰囲気的風土をもつてゐる。これは神戸が誇りにしていいことだと思う。つまり外来文化、歐州文化の影響が完全に育つてしまつた、神戸文化なのだとと思う。ここ百年、先人たちによつてつくられたこの広がりこそ、次の感覚神戸になつていかねばならないと思つてゐる。神戸のイメージは感じるものでなく、私達が先人達を受けついで、どんどん新しく形造つていかなければならぬ直感と選択の時間がやつてきていると思う。



イメージの中の神戸

文・多田智満子
写真・緒方しげを

□わが町坂の町

長年六甲山のふもとに住んでいるので、自分の町はまず坂の町という思いがある。どこへ行くにも、家を一步出れば爪先を下げるだけの坂を降りて行く。帰りはむろんその逆で、爪先上りに坂道を登る。住きは手ぶらでも帰りは荷物をさげていることが多いから、つい車に頼りたくなる。若いころ、中古のボロ車で、冬の朝などエンジンがかからないうときには、坂を自然にころがしながらエンジンをかけたりした。

山麓の住居はしかしことのほか気に入っている。第一景色がよい。北を見れば山、南は海。もつともここ数年、南側に家が建てこんで、居間や書斎から港を眺めることができなくなつたが、それでも

二階からは何とか海が見える。港まつりの花火も二階のテラスから見物できる。

神戸は大都会だけれども東京や大阪のようにだだつ広くないのがいい。私は東京で育ったが、東京は一つの町というより複合都市で、あまり大きすぎて出歩くと疲れてしまう。大阪も不案内なせいかあまり歩きまわる気にならない。神戸ぐらゐのスケールの都市がちょうどよい。

これでもヨーロッパの名高い地方都市と比べれば人口が多すぎるくらいで、これが住みやすい町の最大限の大きさだと思う。坂を降りて、ちょっと乗物に乗つて都心へ行き、用を足して楽しんで、また坂を登つて家に帰る。疲れることなしに都心へ往復できることが、『わが町』という親しさのもてる必要条件である。



経済ポケツト ジャーナル



★次年度神戸経済同友会の代表幹事に後藤俊彦氏

神戸経済同友会の62年度

の代表幹事に阪神相互銀行の後藤俊彦社長が内定した

後藤氏は昭和25年東京大

学卒業

氏

後、神

戸銀行

入行、

太陽神戸銀行から57年阪神

相互銀行社長に就任。

現在代表幹事の竹田剛男

コンビを組むことになる。

金融関係では太陽神戸銀

行以外での代表幹事は初め

て、神戸経済界での顔の広

さと、ソフトな人柄での活

躍が期待される。

★神戸で、水環境問題会議

川環境会議、代表・世話人

開催される

「第十一回琵琶湖・淀川環境会議」(主催琵琶湖・淀

川環境会議、代表・世話人

開催される

★「ダイエーさんのみや」
オープニング
さる10月25日、三宮のダ



真剣に議論された
水環境
の形成
について
議論
して

琵琶湖・淀川流域における明日の水環境をみつめて“人と水との望ましい共生について”をテーマに意見の交換がなされた。宮崎神戸市長、稲葉滋賀県知事、片山京都府副知事らが出席し、水資源開発の促進・水質保全

対策の推進・水質保全
火等、華々しく開店した。開店と同時に、オープニングバーゲンを狙った買物客がぞくぞくとおしかけた。

今回の改装の目玉の一つに、"ゼント・ハウス・クラブ"があり、秘書を持った

中間管理職の秘書代行を行なう等、単なる
鉄・神戸電気鉄道・ダイエー・田崎真珠・ファミリアの6社。企業にとつても消費者にとつても良い結果を望みたい。

稲葉滋賀県知事)が10月30日、神戸国際会議場において開催された。



テープカットを行う
中内潤専務

れ、中内潤専務のオープニングの後、仕掛け花火の点つけられた。華々しく開店した。開店と同時に、オープニングバーゲンを狙った買物客がぞくぞくとおしかけた。

高度情報化社会に伴い、企業と消費者、地域社会をつなぐ接点としての企業広報の重要性を認識し、対応するもの。

10月27日、神戸商工会議所で設立総会が開かれ、

△8月を除く毎月一回の例会を開き、広報担当者同志の交流・研修を図るVという方針も決定。なお、幹事社は、上島珈琲・川崎製

販売店ではない、深まりを持つた店舗になっている。

★企業と消費者の接点
「企業広報研究会」が設立、活動を開始した。

神戸の企業39社による、

オーブニングの式典が行わ



★K O B E オ フ ィ ス レ デ イ ★

玉田二三子さん (20)

(神戸ショールーム)

嵯峨美術短大インテリアデザイン科を卒業、現在クリナップの神戸ショールームに一人で勤務。接客・キッチンレイアウトと精を出す。「一人で淋しいけど、2階の営業所の人やお客様が良き話し相手」と、けなげに頑張っている。映画ファンだが、涙を誘う作品は泣くので観ない。異性に対しては、不幸なことに仲々夢中になれない。自らが甘えるタイプじゃないので、包容力のある男性が…」同世代の男子諸君には「しっかり」と激励。さっぱりとしたB型、水瓶座。

感性豊かにスギヤ（宝塚）デビュー

歌劇の街・宝塚。道行く人も才シヤーラン人が多く、華やかな雰囲気が漂う。神戸沿線とはまた違う味わいをもつ宝塚で、神戸を中心

にアダルトなハイファッショングを開しているスギヤが装いも新たにオーブンした。スギヤ各店はいずれも阪急沿線の駅ターミナル内か、その近くにチーン店をもっており、足の便の良さがセールスポイント。宝塚店も阪急宝塚南口を降りれば目の前にディスプレイが表わされるとい

う便利さ。忙しいOしたちにも好評というのも納得できる。加えてお店の方の対応の細やかさも評判だ。

「ファッションに関する知識が雑誌・テレビ等の影響で氾濫している今、お客様以上の感覚を常に磨いておかなければなりません。こちらに来られる方は大阪や神戸でも商品を見て、目が肥えていたらしくやるので大変です。そしてそれ以上に大切なのは、人ととのコミュニケーションですね。」現



上・見やすく、買いやく改裝された店内 下・中野店長を囲んで

在漆原次長以下4名の女性が笑顔もソフトにアドバイザーとして、それぞれの個性を生かしながら頑張っている。

「会社の帰りにでも顔を見せてもらえるような——宝塚の街のカラーラーを大事に店づくりが考えられています。」と漆原さんと中野店長。

毎日のコーディネイトに欠かせないセーター、ブラウス、スカートなどの単品から少しあらためたまつやのパーティードレス。そしてドレスに合わせられるアクセサリーまで様々な商品が取り揃えられている。



今年のパーティードレス

たワンピース。そしてドレスに合わせられるアクセサリーまで様々な商品が取り揃えられている。

全体的にキヤリア志向が強く、他のスギヤ各店に比べると若やいだ趣きがいかにも宝塚らしい。「やはり歌劇を見に来られる方たちに代表されるように感性も豊かで若いセンスを身につけていらっしゃる方が多いようですね。皆さんハイクラスのおしゃれを楽しんでいます。今後もあらゆるニーズに応えていけるようにしたい」と語る。スギヤ宝塚店は華やかな宝塚カラーに彩られた店だ。

■スギヤ宝塚店 阪急宝塚南口駅構内 ファミリーストアー内 10AM~7PM 木曜定休